

## 虹雅溪に置く露の(下巻)

### 文章見本

## 第八章 即位式の夜

「神那国から触れが参りましたぞ。弟君が領主に就かれることになったとのこと」

カンベエが虹雅郷でかくまわれてからひと月ほど経った頃、何度目かの会合が持たれていた時にその知らせは届けら

れた。

「山狩りを中止した後はどうするかと思うておつたが」  
公式の体裁で届けられた触書を、マサムネはカンベエに手渡した。

自分が幾度となく発信してきたそれを、カンベエはひどく遠いものを感じた。書面を収めた筒を掌に載せると、こんな重さだったかと意外だった。わずかひと月しか神那(くに)を離れてはおらぬのに……

「神那が八十八(やそは)に対して何か行動を起こしている気配はござらぬか？」

触書を戻しながら、これを受け取ったゴロベエはどんな顔をしているだろうかと思う。

「我らに調べの付く範囲では、それはないようだ」

「ふむ。…それでは、シチロージは何も語つてはおらんのか。嫌疑がかかつておるそうだが、一体何の」

「あるいは、全く別の話をしておるのかも。嫌疑といつても今ひとつはつきりとせぬようなのは、そのせいかも知れま

せんな」

郷主の推測に、カンベエの傍らに控えていたキクチヨは内心ドキリとした。

まさか、あの場の責任の全てが虹雅郷の若君にかかつているのか？八十八（やそは）の刺客達の言葉は若君も聞いておられた。事態を理解した上で、なお口をつぐんでおられるというのか——何故？

「いずれにしても、これでカンベエ殿の帰還に向けて、事がひとつ進みますな」

「左様。これまで検討してきたとおり、即位式の喧騒や混乱に紛れてというのが最善かと」

「予定の日取りまで数ヶ月あるようだ。様子を見ながら、テッサイ殿にもしかるべき時に内々の接触を図りましょう」

「かたじけない」

「ところで、虹雅郷を出るまでは巫女（かんなぎ）様の影響下で、一行を保護できるが、国境を越えてからはいかが

されるおつもりか。紅蜘蛛への備えは無論のこと、内密の行動なれば、神那からの護衛は期待できず、こちらが付けて差し上げられる数も限られる」

「うまく宵闇に紛れましょう。館に近付くことさえできれば、それがしと執事とそれからこの」

とそこでカンベエは言葉を切つて、キクチヨに頷いてみせた。「親衛隊長しか知らぬ方途も」

それに応えて、隊長は「ハハッ」と低いが確かな声と共に畏まった。

（今度こそこの身を賭して、お館様の御為、精一杯働きまする！）

「頼むぞ、キクチヨ。今度はこちらがゴロベエを出し抜く番だ」

もう一度頷いてから、カンベエはまだ自由にならない身体でマサムネに向き直った。

「具体的な決行の手筈などもおいおい決まるでしょうが、我が身はまだまだこの通り、回復と言うにはほど遠い。今し

ばらくは、郷主殿と虹雅郷にはお力添えを願います」

「充分に御身を養われよ」

その後、リキチがカンベエに呼ばれた。

リキチは、ヘイハチに対する申し訳なさで一杯で、主君の窮地を救った功績など全く意味を持たないかの如くにしよげかえっていた。

「リキチ。神那へ帰つて、これ迄通りに仕えてやれ」「お、おら、ヘイハチ様を裏切つてしまいました。一体どの面下げて国に帰(け)えることが…」

会わせる顔がないと、今にも泣き出しそうだ。

「お前の話から推察するに、ヘイハチはお前の考え方を分かつておる。その上で、お前に使いを頼んだり秘密を打ち明けたりするのを止めなかつたのだ」

ハッとリキチは顔を上げた。

「儂の言う事の意味が分かるな？この先ヘイハチに何かあった時、支えてやれるのはお前だけだ」

「……へえ。分かりました」

下男の表情にいくらか生氣が戻ってきた。

その様子を見守りながら、キクチヨの中でひとつの理解が生まれていた。

自分への攻撃でわざと急所をはずしたキュウゾウ。もしや、我が主への攻撃にも手加減を加えていたとしたら？

八十八(やそは)の刺客に狙われたお館様が一命を取り留めたのは僥倖と思われているようだが、そのようなことはまずあり得まい。

では、奴らが主命に背いても我らを助けた訳は——まさか？

紅蜘蛛の隠れ里から神那国に戻った途端、ヘイハチはカツシロウに呼び出された。

「ヘイハチ、ヘイハチ。何処にいたのだ。お前に聞いて欲しいことが山ほどあったのだぞ」

「探索の…お手伝いを致しております」

「そうか、お前も心配してくれたか。礼を言うぞ。さ、こちらへ。またお前の考えを聞かせてくれ」

「若…」

「どうした、ヘイハチ。そういえば、顔色が良くないか？山歩きは相当疲れただろうな。私の部屋で休んでいつでも構わぬぞ。ここにおれば、誰も用事を言いつけたりはすまい。それとも、ここでは休みにならぬか？」

「その様なことは」

苦笑しながら、ヘイハチは手近の椅子に腰を下ろした。

乳兄弟のいつもの勝手御免を見咎めもせず、カツシロウは自分の椅子に背を預けた。

「まだ兄上は見つかからない。キクチヨもだ。傷ついたお体で何処にどうしておられるのか…。テッサイは、今のやり方では発見できまいと言うのだ。もう半月以上が経つ故、これからは、全く違う見方をせねばと」

「全く違う見方、ですか？」

「そうだ。しかし、それがどういふものになるかは、まだ分

からんと言って、教えてはくれぬが」

「……」

「お前はどう思う？」

「さあ…私には見当も付きません。第一、狩り…の

様子も、良くは聞いておりませんので」

「その狩り自体、シチロー殿が話されたこと以外、何も分からぬのだ」

そう言うと、カツシロウは更に椅子に沈み込んだ。

狩りの様子——ヘイハチは、首尾良くいくはずだった筋書きを思い起こした。

いつものお楽しみで護衛を出し抜いたつもりのカンベエは、単独あるいはシチロージと二人だけで人目に付かない場所に誘い込まれる。そこへ跡を尾けていた八十八(やそは)の例の剣士が襲いかかる。カンベエの護衛はキクチヨのみ。この親衛隊長は、取引に応じていれば、主君を守らない…

一体何処で筋書きが狂ったのか。

万一リキチが絡むとしたら、何処でだろう。キクチヨに

考えを変えるように言うだろうか。いや、その様な大胆なことが出来る男ではないだろう。領主に注進に及ぶことは、更に考えられない。もし襲撃の場に居合わせたとしたら、すくんで動けないだろう…

あの場で、自分には全く考えも及ばない事が起こったのかも知れない。

何度考えたか分からない堂々巡りを、今回も解決することは出来なかった。

(リキチと会って話をしなければ。戻ってきてくれればだが)